

# みんぱく 私の逸品 マツタロクカムイ（奥に座す神）

標本番号 H0033419  
地域 北海道阿寒郡鶴居村字下雪裡  
収集年 1978年

北海道大学アイヌ先住民研究センター准教授

北原 次郎太

みんぱくのアイヌの文化展示のコーナーを訪れると、壁面の高い場所にこんもりとした黒いかたまりがかけられている。これは釧路の鶴居村字下雪裡に暮らした八重九郎という男性が自宅に祭っていたイナウである。

イナウは、神事の際に神に捧げられる。イナウの上部には木をリボンのように薄く削り出した「キケ」がつけられる。祭壇に並んだイナウからキケが幾重にも垂れ下がり、あるいは紐状に寄り合わされた房となって風に揺れる姿は神々しく、神々がもつとも好む奉納物だというのもうなずける。

イナウには奉納物としてだけでなくメッセンジャーとしての性質もある。イナウの素材となる樹木には、一本一本に木の神が宿っている。イナウを祭壇に立てて祈ると、イナウの内にとどまっていた木の神が抜け出して神々のもとへ赴き、人間の祈りをつたえてくれるという。つまり木の神が人間の使者の働きをするのである。生物・無生物を問わず地上のあらゆる物に精霊が宿り、敬虔な態度で接すれば精霊たちは人間に助力をするものだというアイヌ民族の世界観がここにもあらわれている。

こうした奉納物のイナウは一回性のもので、神事のたびに新しく作られる。神事が終わった後のイナウは、魂が飛び去った抜け殻であり、土にかえて行くのに任せておいた。イナウは神事の直前に作られるから、木の神が人間の許に滞在するのは神事のあいだのほんの一時である。これに対し、本資料は守護神として屋内で恒常的に祭られるイナウである。製作の際にも、人間の傍で未永く加護してくれるように言い聞かせ、出来あがってから上座に安置して事あるごとに祭る。このようなイナウとしては日高地方や胆振地方といった北海道の西部で祭る「チセロカムイ（家の守護神）」が知られてきたが、八重氏の祭った守護神は西部のものとは形状が大きくことなる。八重氏はこれを「マツタロクカムイ（奥に座す神）」とよんでいた。年中行事の度に、新しいキケを挿して祭るので、時間が経つほど煤けた大きなイナウになっていく。マツタロクカムイの黒ずんだ巨躯は、アイヌの信仰文化がもつ多様性と、それが受け継がれてきた年月の長さを教えてくれる。



横から見ると、黒ずんだ古いキケの上に新しいキケを挿していることがわかる。